

平成24年度第2回 琵琶湖博物館協議会

日 時 平成25年(2013年)2月5日(火)

14:00～16:30

場 所 滋賀県立琵琶湖博物館 1階セミナー室

会 議 次 第

1 開 会

2 議 事

(1) 琵琶湖博物館中長期基本計画2012年度行動計画の実績・評価
および2013年度行動計画について

(2) 新琵琶湖博物館の創造(リニューアル)について

(3) その他

3 閉 会

[午後 2時00分 開会]

1 開 会

○司会（兼房副館長）：定刻になりましたので、今年度第2回目でございますけれども、琵琶湖博物館協議会を始めさせていただきます。

委員の皆様におかれましては大変お忙しい中、ご遠方よりお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。

きょうご出席いただいておりますのは11名の方でございます。この会議の定足数は8人ということでございますので、この会議は成立しておりますことをまずご報告申し上げます。

なお、前回は申し上げましたけれども、この会議は公開になってございます。したがって、記者席並びに傍聴席を設けてございますので、その点ご理解いただきたいと思っております。

それでは、議事に入らせていただきます前に、館長の篠原よりご挨拶を申し上げます。

○篠原館長：今年度2回目の琵琶湖博物館協議会を開催することになりました。皆様には大変お忙しいところ、ありがとうございます。

当博物館も、いつもながら申しますけれども、入館者数が37万人ということで、去年より少し減るというような状況であります。博物館の入館者数で全てのことをはかるのは、いささか問題があるとは思いますが、つい二、三日、自然史系博物館の懇談会の館長会議に行ってきたんですが、群馬県立自然史博物館の県の認知度は下から一、二を争うところが、やっと汚名を返上しまして47位になりましたと。48位はどこですかと言ったら、茨城県ですと、両方の館長が来ていましたけれども。入館者数がどのぐらいですかと、ついですから聞いたのですが、そうすると、16万人ですと、減っていますなんてことをやっています、どこもかしこも同じことをやっているんだなということで、大変だなというふうに思います。

私どもの博物館は16年目になって、そろそろリニューアルを考えなくちゃいけないということになって、昨年度、決心をして始めましたけれども、それまでにもやらなくちゃいけないことがたくさんあります。この協議会の皆様方にもいろいろ議論をしていただきたいなと思っております。

県の内外で博物館をめぐる情勢は非常に厳しいことは、皆さん、県政だけにかかわら

ず、いろいろ御存じだろうと思いますけれども、開館20周年をめぐりに展示更新を初めとして、新博物館の創造に向けて、ソフト・ハード両方の面から考えていきたいと思えます。

今回は特に、中長期計画の今年度の実績と来年度計画について審議していただきますけれども、来年度の計画といえますのは、実際は新琵琶湖博物館ビジョンの、去年は概要でしたけれども、ことしはビジョン案という形に一段ランクを上げて説明をさせていただきますので、今年度の実績と来年度の計画のうち、計画については、この新琵琶湖博物館創造ビジョン案のほうについて説明させていただいて、皆様の忌憚のないご意見を賜りたいというふうに思えます。

こういうことを通じて、より地域に愛されて、世界に発信できる博物館を目指していきたいというふうに思えますので、皆様のこれに関するさまざまなご意見を、当館の運営に生かしていきたいと思えます。どうぞよろしくご審議いただきたいと思えます。

○兼房副館長：では、議事の進行でございますけれども、当会議の条例で定めてございまして、議長は当協議会の会長さんのほうで進行していただくようになっております。

市川会長さん、どうぞよろしくお願ひいたします。

2 議 事

(1) 琵琶湖博物館中長期基本計画2012年度行動計画の実績・評価および2013年度行動計画について

○市川会長：それでは、最初の議事に入らせていただきます。

「琵琶湖博物館中長期基本計画2012年度行動計画の実績・評価および2013年度行動計画について」、事務局からご説明をお願いいたします。

○事務局（藤村課長）：それでは、説明をさせていただきます。企画課の藤村です。よろしくお願ひします。座って説明をさせていただきます。

資料といたしましては、A3のホッチキスどめの資料でございます。

琵琶湖博物館中長期基本計画 2012年度行動計画の実績・評価および2013年度行動計画になります。

現在、中長期基本計画の第3段階目の2年目が終わろうとしている状況でございます。この中長期基本計画は、一番左の列に基本方針というところがありますが、9つの基本

方針が定められておりまして、その基本方針ごとに基本計画の活動計画を立てている、こうした構成になっております。

この資料の2つ目の枠が第3段階、2011年度から2015年度の活動計画ということで、それぞれの基本方針をさらに細分化いたしまして、事業名ごとに活動方針・内容と達成目標を定めております。そして、右の枠に、2012年度の行動計画の実績・評価ということで、それぞれ行動方針・内容、目標値、そして達成度と自己評価をしています。最後に、2013年度の行動計画として、行動方針・内容、目標値を定める。こうした構成で、中長期計画の進行管理を行っていくものでございます。

まず1つ目の基本方針であります「資料が活用できる博物館」ですが、そちらの指標・目標値に書いてありますように、展示リニューアルを支える資料整備として、データベースを新たに2分野構築して、公開をする。電子図鑑1件、目録1件の作成。そして、データベース登録件数45万件という大きな目標を掲げております。

それに対しまして5つの事業を設けまして、それぞれ進行管理を行っておりますが、まず1つ目の展示リニューアルに向けての資料の充実というところでは、2012年の行動計画の欄をごらんいただきますと、その行動方針・内容として、2011年度でできなかった展示物調査を行い、展示リニューアルに活用できる資料の概要を把握するというので、その目標値として、大型展示物を中心に所在確認とリストを作成するという、こうした目標が定められております。これにつきましては、ほぼ達成という評価をしておりまして、企画展示で作成した主な大型展示物について、所在確認とリストが作成できたと考えております。

また、2013年度の行動計画では、行動方針・内容として、時限保存資料も含め、展示リニューアルに活用できる資料を全体的に把握するというので、その目標値として、これまでに企画展示等で作成した展示物リストに加えて、時限保存資料管理リストを作成する。それらの保管状況を把握するという、こうしたものを掲げております。

次に、地域資料やコレクションの整備の強化、そして資料の活用体制の確立。これにつきましては、一部未達成、あるいは未達成ということで、三角の評価をしています。地域資料やコレクションの整備の強化につきましては、寄贈されました資料について整理を行い、資料としての利用価値を高めていくということで、情報を集約し、ホームページで表記するという目標を掲げておりましたが、主な寄贈コレクションの情報は集約

できましたが、それをホームページに表記する具体的な作業が今後の課題として残っている、こうした状況になっております。また、資料の活用体制の確立では、リニューアルに活用できる資料の調査と目標のわかるリストの作成ということを目標に掲げておりますが、一部しか達成ができていないと、こうした状況でございます。

4段目、資料情報の公開・増補・改良につきましては、第3段階の活動計画の大きな目標としては、資料目録印刷物1件の刊行、電子図鑑1件、資料目録1件の新規公開、既存資料データベースの着実な増補を掲げておりますが、2012年度目標として、公開中のデータベースの表示様式の統一、電子図鑑データの追加公開、未公開の整理済み標本データを公開する方法を検討するということですが、これも未達成ということになっております。特に、新規データベースの作成につきましては、これは本質的に予算の問題がございます。そうした制約もあって、上記の未達成部分を含めて、予算、体制上の課題から達成が難しかったという現状がございます。

そうしたことから、2013年度の行動計画では、昨年度に引き続き、既存のデータベースや電子図鑑の表示様式を統一し、より利用しやすいものにする。同時に、外部資金の導入など、新規公開に向けた方策を検討しつつ、公開内容の拡充を進めるということにしております。

次に、「研究を進めて活かせる博物館」ですが、第3段階の活動計画としては、博物館ならではの学際的・地域的研究の確立ということで、2012年度の目標を総合研究による成果報告の講演等の開催1回、地域の人びととともに行う研究調査成果の発表8件、外部資金による研究代表者・研究分担者研究事業20件という、こうした目標を掲げておりますが、ほぼ達成という評価をしております。

2ページを開いていただきたいと思います。「新たな参加と発見ができる博物館」ということで、指標・目標値として、常設展示の更新計画の策定を掲げております。

まず上段の「集う・使う・創る・新空間」の整備につきましては、年間12件の利用ということで、ほぼ目標を達成しております。来年度、引き続き同様の目標を設定したいと思っております。

3段目の展示交流員の新しいあり方の検討では、第3段階の達成目標として、リニューアル後に向けた新たな展示交流員のあり方の策定ということで、2012年度の行動計画では、目標値として、他館における展示交流に関する事例の収集、展示交流のノウ

ハウの継承に必要な仕組みの検討を挙げておりまして、ほぼ達成できるのではないかなと思っております。

来年度につきましては、現在までの展示交流の評価とリニューアルまでの短期的な展示交流のあり方について、収集した情報に基づく検討を開始し、展示交流のノウハウを蓄積する仕組みを構築し、試行して、中間報告を作成したいと思っております。

4段目の既存展示の評価と展示リニューアルの策定ですが、第3段階の目標として、2016年リニューアルオープンに向けて、よりよい展示のあり方を検討するということですが、2010年につきましては、その一部の取り組みとして、耐震補強の完成と短期的な展示更新の実施1件、これを目標に掲げており、おおむね達成という評価をしています。

次に、3ページをごらんいただきたいと思えます。「体験と交流を促す博物館」です。

まず1段目、地域主体の体験・交流活動に役立つ博物館の仕組みづくりですが、2012年度の行動計画の目標値といたしましては、体験学習プログラムの開発、新規1件以上、サポート・シートの開発、新規1件以上、団体利用案内を利用しやすい内容に改善し、webで発信する。こうした目標に対しまして、学習プログラム等の作成や、サポート・シートの開発をいたしました。ほぼ達成という評価をしております。2013年度の行動計画の目標にあっては、同様の設定をしています。

次に、「対話と応援ができる博物館」。下から2番目の欄に、フィールドレポーターの参加者増（特に参加者が少ない地域）というものがあります。2012年度の行動計画では、その活動方針・内容として、登録者数の少ない地域の活動強化および拠点づくり、より多くの人に参加してもらえる仕組みづくり、フィールドレポータースタッフの新規参加とその育成を図るということで、具体的な目標値の設定をしておりました。これにつきましては、残念ながら一部未達成ということで、三角の評価をしております。博物館でフィールドレポーター交流会を実施いたしましたし、「あさ、ひる、ばん、博物館を楽しもう！」で活動紹介なんかも行いましたが、自己評価の下のほうに掲げておりますが、わくわく探検隊などの事業負担が大きく、地域での活動が減り、スタッフの新規参加者もなかったことから、今後、他の事業の活動ペースに合わせた取り組みが必要になってくるのかなというように考えております。

次に、4ページは、先ほどの「対話と応援ができる博物館」の続きでございます。

さらに5つの事業が挙がっておりますが、これにつきましてはほぼ目標を達成しているのではないかと考えています。評価のほうも二重丸あるいは一重丸がついております。

特に、2段目の地域の様々な人たちとの有機的連携による博物館活動の展開につきましては、2012年度の行動計画の目標値と、様々な団体等と協力した交流機会の提供・複数以上のはしかけやフィールドレポーターと協力した体験プログラムの提供が7件、企業、大学、団体など多様な主体と連携した交流プログラムの提供が5件、そして地域連携事業200件と、この数値目標を掲げておりましたが、これにつきましてもほぼ達成というふうに考えています。特に、地域連携事業につきましては、これは12月末のデータでございますが、館内で49件、館外で69件、学校連携で121件、合計しますと239件ということで、目標値を上回る成果を出しております。

その横の総評の部分の下から5行目に書いておりますが、今後はリニューアルに向けて利用者のニーズに即した利用者制度の検討が必要であるということで、これまでの、はしかけ、フィールドレポーター以外に、参加者の支援制度というか、新たな制度を設けていきたいということで、そうした考え方をビジョンでも明らかにしております。

それでは、5ページをお願いいたします。5ページは「拠点としての施設整備」です。

ここでは5つの事業が挙がっております。第3段階の大きな目標としましては、施設・設備の更新整備計画の策定でございます。

まず1つ目、収蔵施設の充実と環境整備につきましては、2012年度の行動計画では、未固定棚の固定という耐震対策、そうした機械的な部分を掲げておりましたが、残念ながら未達成という状況になっております。動物収蔵庫内での簡易なストッパーの備え付けなどは行いましたが、これも予算的な制約もありますので、抜本的な改善につきましては、やはりリニューアルで対応をしていくべきかなというように考えています。

2段目のIPMの推進。これは、貴重な博物館の資料・標本等を有害生物から守るIPM対策ですが、2012年度の行動計画では、内部研修を実施し、館職員に対してIPMの普及を行うということと、2012年度に行った生物調査の結果、チャタテムシの基準値1を超える収蔵庫が増加したため、各収蔵庫の清掃を強化するという一方で、ほぼ達成できたのではないかなと思います。ただ、民俗収蔵庫1については、まだ基準値を超えている部分がありますので、燻蒸等の実施も検討したいというように思っております。

3段目の情報システムでございますが、情報発信を行った効果について数値的な判断を行うということですが、本年度から移動博物館を広報の一環として実施をいたしました。その成果について来館者アンケートの項目に移動博物館を新たに加えて、数値的な評価も行っております。ただ、はじめて間がないということもありまして、期待したほどの反響はまだないという現状でございます。また、企画展示の機会を利用しまして、ツイッターを琵琶湖博物館でも始め、情報発信を行い、リツイート件数あるいはアクセスの件数、そうしたものを効果の検証に利用しております。

総評のところに書かれておりますが、こうした耐震の問題やIPM対策は、危機管理上の問題として、至急に対応すべきものではございますが、やはり予算的な制約もありますので、今後はリニューアルのほうで抜本的な解決を図っていきたいと思っております。

次に、「柔軟な運営組織」です。2012年度の行動計画の行動方針で、新琵琶湖博物館の創造構想検討の中で、必要な専門スタッフの精査を行った上で、既存スタッフの再配置を含めて検討するということですが、これにつきましては、来年度の執行体制を強化して、リニューアルに向けた体制づくりを行いたいと思っております。

6ページでございます。「社会的支援と新しい経営」で、まず広報・経営戦略の具体的な展開ということで、2012年度は移動博物館を実施いたしました。琵琶湖淀川流域を中心に年10回展開をしていくということで、これについては達成ができたと思っております。京都、大阪、東京等6か所と書いてありますが、間違いでございます。11か所です。11か所で実施済み（本年度中に計12回開催予定）ということになっております。また、こうした広報・経営戦略につきましては、平成24年度にマーケティング調査を実施いたしました。これはビジョン策定の前提となるマーケティング調査でありまして、後ほど紹介をいたしますが、そうした結果を反映して、展示交流空間、施設・設備のリニューアルの基本計画を作成し、その中で新しい琵琶湖博物館の広報・PR活動を行っていきたいと考えています。

最後、「存在基盤の確立」です。一番下の欄、新琵琶湖博物館の創造に向けた構想の推進ですが、目標として、2016年のリニューアルオープンがございまして、新琵琶湖博物館の創造に向けてのビジョン策定ということで、きょう、2つ目の議題に当たっておりますビジョンでございます。

本日、博物館協議会の委員の意見を反映させていただきまして、ビジョンを策定したいというように考えております。

以上でございます。

○市川会長：ありがとうございました。

それでは、議題（１）琵琶湖博物館中長期基本計画２０１２年度行動計画の実績・評価および２０１３年度行動計画について、議論を進めてまいりたいと思います。

ご質問、ご意見等、どなたからでも結構ですので、よろしくお願いいたします。

何でも結構です。

ツイッターによる情報発信の効果について検討を行ったとありますが、その結果、どういうことに。

○事務局（藤村課長）：７月に実施をいたしました企画展示「ニゴローの大冒険」のPRを機会に、一応試行的にツイッターを行いました。その結果、アクセスをしていただいている方が、数はそんなに多くはないんですが、約３００件以上ということで、一定の効果があったのではないかなと思っております。今後は、実はこのツイッターに加えて、フェイスブックを取り入れまして、幅広い層に訴求できるような情報システムを使ったPR活動を展開していきたいというように思っております。

○市川会長：フェイスブック、ツイッターで発信したときに、こちらで把握できない状況というか、次から次に情報が伝わっていく中で、どれぐらいのところまで伝わったのかとか、そういうのは全く把握できないですかね。

○事務局（藤村課長）：そうですね。今のシステムでは、ちょっと把握するのは難しいと思いますが、講演会なんかのPRでツイッターがずっと伝わって、参加をいただいた方もおりますので、ある程度の広がりには出ているのではないかなと推定はできるんですけども、具体的に数字を把握するのは難しい状況でございます。

○市川会長：あと、伝言ゲームには、情報がどんどん変わっていくというのが当然つきものだと思うんですが、そういうところでの弊害みたいなものはなかったですか。

○事務局（藤村課長）：これにつきましては、おかげさまで今のところありませんでした。

○市川会長：ほかに何かございますか。

○北島委員：質問で、４ページの「対話と応援ができる博物館」の計画ですけど、交流・連携に関わって、２０１２年度行動計画の実績・評価の真ん中あたりで、地域連携事業

が12月末現在で館内と館外、学校連携の件数を書いています。連携が121件ということですが、校種講習別とか内容的なもので、具体的にはこういうふうな連携をしているということを教えていただくとありがたいと思います。

○事務局（交流担当楠岡GL）：交流担当の楠岡と申します。

学校連携の内容ですけれど、主に学校の体験学習で琵琶湖博物館を訪れた団体を数えております。内容的には例えば、プランクトンの観察ですとか、化石のレプリカづくりとか、昔の暮らし体験等々、いろいろなプログラムがあります。

○市川会長：いいですか。

○北島委員：はい。いわゆる校外学習といった感じですかね。

○事務局（楠岡GL）：学校関係はそれが中心になります。

○北島委員：小学校あたりは多いんでしょうか。

○事務局（楠岡GL）：そうですね。小学校が圧倒的に多いです。

○市川会長：どうぞ。

○津屋委員：今の部分はざくっと数字だけ出ているので、例えば県内だったらどのエリアの学校が利用しているとか、来ている学校、行った学校とか、もうちょっと詳細な分析の資料があるとわかるかなと思ったんですけど、また機会があったら、その資料を見せてくださいますか。

○事務局（楠岡GL）：一応時間表はつくっていますので、どこの地域の学校が来られて何をしたとか、そういう記録は全部残っていますので、お見せすることは可能です。

○津屋委員：あと、私のほうでは、移動博物館の所管が企画調整で、実際、地域連携という形、持ち出して何か交流担当になっているんですけど、そのあたり実際によく連携で調整をお願いするときに、移動博物館は非常に人気があるんですけど、その出番の部分というのは、いろんな地域で、いろんな企画の連携場所になるんですけど、そのあたり、企画調整課が窓口になってくるんでしょうか。

○事務局（藤村課長）：はい。移動博物館の窓口としては企画調整課ですが、博物館一本としてお受けをしておりますので、交流にお話をいただいても対応できるような状態になっています。

○兼房副館長：そもそも企画調整が窓口になっていますが、企画調整課のほうで広報を担当してございます。もともと移動博物館の場合は、主に下流府県の方々から来ていただ

くということのまず発端がございまして、広く琵琶湖博物館を知っていただく、取り組みをしていただくというのが始まりですので、広報が窓口になってまいります。その関係で企画調整課になっているということです。

ただ、現在もそうなんですけども、それぞれ各地、あるいは県なりでやる場合に、学芸員のいわゆる講義であったりとか、説明であったりとかいう機会がありますので、これは確実に全館体制でやっていくということになります。

○津屋委員：今後の部分で、学校連携だけじゃなくて、公民館とか地域のいわゆるコミュニティの中で、どこでも博物館という形で広げたいという方向性がある中で、移動博物館のキットがどのぐらいかはあれですけども、サテライトの博物館をつくっていくのと違って、ある種、あつという間に博物館というような、準備についても驚く早さでされていますし、スペースがどうであっても、そこでつくれてしまうという非常に多様性もありまして、多分すごい可能性を秘めているとは思いますが、外から見たときに部局が2つに分かれているので、交流の部分の戦略的なところについても、素材としてはかなり有効なのかなと思って、ちょっと質問をさせていただきました。

○橋詰委員：広報で、先ほどツイッターとフェイスブックというお話を伺ったんですけれど、前回1回目の時にも広報の中で、婦人会の方に連絡がいつているみたいなことを伺いました。私は、地元で婦人会に入っているのですが、全く連絡がなかったと思います。私は大津に住んでいます。以前は、婦人会が盛んで、各地域とも入会されている方が多かったと思います。しかし、私の住んでいる地域では、毎年のように地域ごとの婦人会が解散されたり、婦人会から脱会される方が増えたりしています。入会者が少なくなっているせいなのか、現状として以前のように様々な連絡やお知らせが入らなくなっているように感じています。

また、先ほどのご説明の中で、来られていない方の中で「大人の潜在利用者層」とありますが、「どこに広報が届いていないのかなあ」と考えてみたのですが、例えば、婦人会に入会しておられる方の中にも子どもが大きくなって、学校からもらっていた広報を読むことがなくなっておられたり、仕事をはじめて情報を得る時間が少なくなったりするなど、琵琶湖博物館の情報を目にする人がなくなっている人も多いと感じています。私のようにフェイスブックやツイッターをしていない人も多いんじゃないかと感じています。また、私の嫁ぎ先の父や母の周囲の方々を見ていまして、十分に琵琶湖

博物館の情報が伝わっているようには感じられません。「インターネットや来館者アンケートでは探ることのできない層」を洗い出していただき、その層にどのようにすれば情報が届くのかということ、ぜひ考えていただきたいと思います。

本当に小さいことですが、私自身「今回何ができるのか」と考えてみました時に、とにかくいろいろな層の方々に実際に話を聞いてみるのが大事ではないかと考え、いろいろな方に話を伺いました。中でも、興味を持ちましたのは、美容院にお勤めの方のお話です。「良いのは分っているし、行ったら楽しいかなあと思うんですけど、月曜日が休みなんですよねえ」「関東は、また違うところがあるけど、関西の美容院のほとんどは月曜日が休みで、定休日が重なってしまい、お客さんには勧めることも多いのに、我々はいけないんですよね。」と。そこで、私が「夜の博物館」もあるみたいですよと伝えると、「そのような企画があるなんて知らなかったなあ。ここまでは届いてないよ」とおっしゃっていました。このように、流しておられる情報が「どこまできちんと届いているのか」ということを一つ一つ確認していただくことが大事ではないかと思えます。

○市川会長：いいですか。

○兼房副館長：ご意見、ありがとうございます。婦人会のほうで余り届いてないというご意見がございましたが、確かに婦人会連合会の総会等を通じて、その場をおかりして、私ども担当の者が出かけて行って説明をさせてもらう、あるいはチラシを配らせてもらう、そういう機会をとらえてやってございました。

そのあと、連合会からその地区の婦人会さんにどれだけ下りているかということは、私どもも掌握してなかったものですから、そういったことにもこれから気をつけていきたいなと思います。

広報のほうにつきましても、確かにいろんな分野から広報不足だというご指摘を受けています。このあたりは今後の広報連絡調整会議等を通じて、もう一步踏み込んで徹底していきたいなというふうに思います。ありがとうございます。

○市川会長：今のお話は後の議題にも関連してくると思いますので、この議題につきましては、このあたりにいたしたいと存じます。

(2) 新琵琶湖博物館の創造（リニューアル）について

○市川会長：引き続き、議題（2）新琵琶湖博物館の創造（リニューアル）について、事務局からご説明をお願いいたします。

○事務局（藤村課長）：資料は、新琵琶湖博物館創造ビジョン案でございます。

まず1ページ目、目次になりますが、ビジョンは5章から構成をされております。

第1章で、琵琶湖博物館の使命と基本理念、そして琵琶湖博物館創造の基本的な考え方を示しております。第2章で、現状と課題を分析して、第3章で、リニューアルに向けた考え方を整理しております。そして第4章で、常設展示を初めとしたリニューアルの概要を示しております。

それでは、2ページの琵琶湖博物館の使命と基本理念、基本的な考え方です。

第1回の協議会で、ビジョン素案の概要版でもお話をしましたように、博物館の使命と3つの基本理念、そして「地域だれでも・どこでも博物館」の実現という中長期目標は継承をしていくということで考えております。

そして、これまでの取り組みを評価いたしまして、課題を分析し、社会ニーズの変化等も踏まえまして、過去、現在、未来をとらえ直し、「湖と人間」の新しい共存関係のあり方を提示する展示交流空間の再構築を行うこととしております。

新琵琶湖博物館の創造によりまして、琵琶湖博物館が琵琶湖・淀川流域、そして「関西」をリードする環境学習・情報発信の拠点となるもの、また地域に根ざしながら、広く世界を視野に入れた研究・交流のネットワーク施設となるものを目指していきます。

それでは、3ページをお願いします。

第2章の琵琶湖博物館の現状と課題の1つ目の、琵琶湖博物館の実情と現状です。

琵琶湖博物館は昨年6月に来館者800万人を達成しました。博物館事業の基礎をなす研究・調査では、「湖と人間」をテーマに、総合研究、共同研究や、外部資金を獲得しての研究など、幅広い研究・調査に取り組んできました。こうした研究を通じまして、プランクトンや昆虫などの新種や新記録種が200種以上発見されたところでした。

また、琵琶湖博物館の水族展示は、魚類を中心に約170種、1万7,000点を飼育しておりまして、淡水生物を扱う施設としては日本最大級であり、保護増殖センターを併設し、天然記念物や絶滅危惧種など約40種の保護増殖を行う我が国の希少淡水魚類の系統保存の中核施設となっております。

こうした研究の蓄積・実績は、琵琶湖博物館ならではの学際的・地域的研究として高く評価をされています。

また、交流・サービスとしては、観察会や体験教室など年200回以上開催し、全国に先駆け、はしかけやフィールドレポーターなど、地域の人びとが博物館事業にかかわる制度を構築してきました。

資料の収集、発信では、これまで地学資料や歴史・生活文化資料など85万点を収集し、45万点を整理登録したところです。こうした成果は資料データベース17分野、電子図鑑8分野でインターネット公開をしております。

こうした地域に根ざした活動は深まり、広がりを見せる一方で、4ページのグラフにあります、2000年(平成12年)に50万人だった年間来館者数が、2011年(平成23年)には37万人と減少をしました。来館者数の構造分析をしますと、子ども連れの家族や学校利用はほとんど変わりませんが、大人の利用者の減少が顕著となっています。

それでは、5ページをお願いします。

琵琶湖博物館は開館以来、16年が経過しました。その間、博物館を取り巻く状況は大きく変化をしてきております。少子高齢化の進展、高度成長から生活の質を重視する成熟の時代への転換。人びとの環境に対する考え方や価値観の多様化、生物多様性や持続可能社会、生態系サービスなど、開館当時にはなかった、あるいは一般的ではなかった概念が社会的に認知をされるようになってきました。

また、外来生物、獣害、琵琶湖北湖深層部の低酸素化、水草の異常繁茂など、新たな環境課題が顕在化し、低炭素社会の実現に向けた社会的な動きも生まれまして、そうしたものに対する情報発信が求められております。

琵琶湖博物館ではこうした現状と課題を踏まえて、リニューアルの検討を行うため、マーケット調査を実施いたしました。6ページ以降に、その一部を載せております。

まず琵琶湖博物館の利用者ですが、6ページの真ん中のグラフに示されているように、家族連れが中心となっております。また、グラフ3の学校利用では、小学校では4回以上来館した学校が5割あるのに対しまして、中学・高校になりますと逆に、「利用したことがない」が7割、8割と高くなっておりまして、小学校ではよく利用されているが、中学・高校になると、利用が少なくなってきました。

次に、7ページのリピーター率です。グラフ4にあります。5回以上のヘビーユーザーが全体の4分の1あります。また、グラフ5に示されているとおり、4回以上の来館者が増加する傾向にあります。しかしながら、グラフ6が示すとおり、多くの来館者が滋賀県在住者ということになっております。また、一番下のグラフ8では、強い再来館意欲を持つ人が6割以上にのぼっております。

8ページの来館者の交通手段ですが、圧倒的に自家用車が多い、こうした現状がわかります。グラフ10は来館目的を調査したのですが、常設展示の観覧を目的とした人が近年右肩上がりに上昇しています。一番上の紫色の菱形のもので、平成23年以降、急激に上昇しております。

グラフには示しておりませんが、下のほうに書いている項目があります。琵琶湖博物館のみを目的とする来館者、これは減少傾向にあります。道の駅やイオンモール草津などと合わせた、いわゆる複合的な利用が増加をしております。来館時間も、初めての方は少ないですが、来館回数が増えると、滞在時間も長くなる傾向にあります。

次の9ページは、博物館の非利用者の調査になります。滋賀県、京阪神、東海でインターネット調査を行って、600サンプルを収集した結果でございます。グラフ11のとおり、琵琶湖博物館を利用したことの無い人の8割は県外居住者であるということがわかります。しかし、琵琶湖博物館を訪れたことの無い人の5割は、実は他の博物館を訪れておまして、グラフ12のとおり、7割以上の方は「博物館が好き」というふうに答えております。博物館を利用しなかった理由としては、グラフ13にあります。 「遠い」「時間がない」という、いわゆる物理的な限界のあるものもありますが、「興味をひかれる催しがない」というものもあまして、ここは展示等の魅力を上げることで、たとえ遠くても、時間がなくても来ていただけるようになるのではないかとこのように考えております。

次に、10ページの琵琶湖博物館の認知度ですが、インターネット調査では、現在では4割の人が「全く知らない」というように答えております。中ほどの棒グラフが示しているように、滋賀県内で「よく知っている」と回答した人は7割弱なのに対しまして、他府県では逆に「知らない」という人が7割ということになっております。こうした中でも下の棒グラフが示しますとおり、子どもがいる世代では、「よく知っている」と答えた人が多いということになります。

インターネット調査、館内アンケート調査も含めまして、琵琶湖博物館に対するニーズを把握したものが次の11ページでございます。要望の高いものとして、興味深いテーマの展示、親子で楽しめ、子どもも楽しめる展示やイベント、大人が満足できる深い知識を得られる展示、レストランやミュージアムショップの充実などがあります。

評価や期待の高いものといたしまして、下のほうに書いておりますが、水族展示室、C展示室「湖の環境と人々の暮らし」も評価をされておりますけども、全体としてさらに詳しい展示解説を期待する声がございます。

利用者の「満足度」と「期待度」を、琵琶湖博物館の展示や機能についてポートフォリオ分析をしたものが次の12ページでございます。縦軸に満足度、そして横軸に期待度を取り、上に行くほど満足度が高く、右に行くほど期待度が高いことを示しております。期待度・満足度ともに高いのがAグループ、期待度は高いが、満足度が低いのがBグループ、期待度も満足度も低いのがCグループ、期待度は低い、満足度は高いのがDグループとなります。

これによりますと、水族を初め、C展示室等がAグループになります。リニューアルによる魅力向上により、さらに満足度を高め、集客効果が大いに期待されるグループというように考えております。

次に、期待度が大きいにもかかわらず、現状の満足度が低いものがBグループでございます。ホームページやレストランなどがあり、リニューアルに当たり改善が求められているものでございます。

次に、満足度が低く、期待度も小さいが、満足度を高めることにより琵琶湖博物館の価値を高め、魅力を向上させるものとしてCグループがございます。ミュージアムショップ、休憩スペース、カフェテリアなど、琵琶湖博物館が開館以来実施をしてきました来館者アンケート調査結果でも、不満として上位に挙げられている項目、そうしたものの改善が強く求められているところでございます。

次に13ページです。県内外における博物館の一般的な利用状況をまとめております。

観光ニーズとして、滋賀県を訪れる観光客の大半は、自然、琵琶湖に興味を持っております。そして、博物館を訪れたことのある人の9割以上が、旅先で博物館を訪れています。また、親子利用では、子どもを親と一緒に博物館に足を運んだことのある人は、自分が親になっても子どもを連れて博物館を訪れる、こうした傾向があります。

調査結果のまとめとしまして、今後の利用者数の向上に向けて広報活動を推進する。県外居住者等、潜在的な利用者にアピールする必要がある、また観光客のニーズも踏まえた屋外体験の充実や観光地との連携、子どもや親子連れが楽しめる展示やイベントの提供などが求められております。また、小学生のときに来館をして、それ以来、中学・高校・大学と来館が途絶えてしまうという、こうしたケースが非常に多いわけですが、この断絶を埋め、将来にわたり継続的な博物館利用者となっていくための動機づくりも必要になってきます。

14ページにある琵琶湖博物館協議会から出た意見にありますように、学べる、楽しめる、遊べる、ためになる工夫と要素の導入。大人が一人で行ってみたい、再来してみたい、学んだり、遊びたい気持ちになれる場。大人のみならず、子どもが主役になれる場といったことを、博物館のリニューアルでは目指していこうと考えております。

こうした調査結果や博物館協議会の意見をもとに、15ページ以降で、リニューアルに向けた考え方を整理いたしました。

まずは、調査結果から見てきたターゲット層でございます。

1つ目、大人の潜在利用者層です。これに対しては、館の存在や展示・イベントの魅力伝える情報発信力を強化しまして、大人が一人でも利用したくなる展示やサービス、レファレンス機能の強化を図っていくことを目指します。

次に、観光客です。観光客が興味を抱く展示やイベント、屋外見学や体験、周辺観光スポットとの連携を強化します。

そして、親子利用者層です。子どものころから博物館に親しんでもらい、大人になっても継続的に利用していただける展示・体験・空間の提供を行います。

最後に、学校団体・大学です。小学校の利用が多いですが、それ以降の利用が極端に少なくなっております。県内の大学と連携することにより、大学生の利用が増加するなど、利用者増に向けたサービスの開発、プロモーションが必要になってきます。

次に、16ページの基礎機能、周辺環境のリニューアルに向けた考え方です。博物館の5つの基礎機能について、社会の変化、利用者ニーズを踏まえた発展・改善とすることとします。

まず1点目の調査・研究です。これまで研究成果に基づき、過去、現在、未来をとらえ直して、「湖と人間」のより良い共存関係を考える新たな発信を常設展示で行います。

交流・サービスでは、より魅力あるプログラムの開発、より多くの人が博物館と関わり、能力を発揮する場となる新たな制度を創設する。来館者アンケートでこれまで指摘をされてきました交流やサービスに対する懸案事項の改善、レストランやショップなどのアミューズメント機能の強化、大学連携による大学生の博物館利用機会の拡充などに取り組んでいきたいと思っております。

情報では、情報機器の更新、ICT（情報通信技術）の活用やレファレンス機能の充実等を行います。

資料整備では、現在、収蔵庫で保管されている資料・標本を展示に活用し、また資料を良好な状態で維持・保存するための総合的有害生物管理を推進できる施設整備を図ります。

17ページの展示では、これまでの研究成果、収集された資料、地域の人びとが持つ貴重な資料の展示が可能となるよう、中規模な更新が可能な、可変性の高い展示空間へと改修をいたします。そして、開館以来、現在に至る課題に対する展示更新を行い、環境先進県にふさわしい展示内容といたします。

また、周辺環境に対しましても、年齢や障害、国籍にかかわらず、楽しめる施設として、ユニバーサルデザイン化などを推進します。

次に、18ページのリニューアルの概要です。

まず、新たなコンセプトとしまして、「高度化・複雑化した情報をわかりやすく、タイムリーに伝える博物館」「大人も日常的に楽しめる、活用できる博物館」の2つをコンセプトとしております。したがって、展示はもちろん、屋外交流空間やレストラン、ショップ等においても、多様な発見や体験を提供し、自分と琵琶湖地域のかかわりを意識できる展示やプログラムを整備します。

これらを通じまして、さまざまな体験や交流により、「湖と人間」のあり方に向き合える場となることを目指していきたいと考えています。

それでは、19ページをお願いします。

常設展示では、こうした2つのコンセプトのもと、発信力の高い展示を目指します。具体的なポイントとしては、実物資料を活かした展示、展示更新が随時可能な可変性の高い展示、自分たちの日常とのかかわりが意識できる展示、近年の環境に対する考え方、価値観の変化や新たな環境課題に対応できる展示、地域の人びとの研究成果や収集資料

を紹介する市民とつくる展示とすることです。

展示ストーリーの考え方としては、20ページに図を示しております。

「湖と人間」の未来を考えるため、「現在」をとらえ直す3つの異なる時間スケールを設定し、それぞれの時間スケールで理解できる自然や暮らしの変化、その関係性を伝えます。

A展示室では、数百万年から数万年の時間スケールで、琵琶湖と生き物のおいたちとして、現在の琵琶湖にしかない生き物の紹介、そこにいる理由の問いかけからスタートいたしまして、過去へとさかのぼることによって、長い時間スケールの中での地球の活動や気象変化により形成された琵琶湖の姿や生き物の進化と絶滅、移動などを紹介します。人がかかわらないで起きる自然の営みと、生物としての人を知ること、次のB展示室やC展示室に向け、人とは何かを考えてもらう気づきの機能も担います。

21ページをお願いします。

B展示室ですが、数千年から数百年の時間スケールで、人の暮らしや自然観・生き物観の変化を紹介します。現在に残る食文化や祭りなどの風習を通じて、「湖と人間」の関連性の変化や、お互いに与えてきた影響を歴史的に振り返る展示となります。

C展示室では、十数年という非常に短い時間スケールで、高度経済成長以後起こった環境の激変、人びとの意識の変化、琵琶湖が抱える新たな課題を分野横断的に多様な視点で紹介をいたします。また、学芸職員による最新の研究成果を定期的に更新しながら紹介するコーナーを設け、常に新しい話題を提供します。

水族展示では、琵琶湖とその周辺の淡水生物を主役とし、その生態、生物間の関係、人と生き物の関係を紹介します。また、ドーム型のシアターで、観覧者が微生物サイズになったように、肉眼では見えない琵琶湖の生態系を支えているプランクトンなどの生き物の姿を3D映像で体験できるマイクロアクアリウム、そうしたものの設置も検討することといたします。

22ページの交流空間の再構築では、参加と発見、対話と交流を促す空間として、琵琶湖博物館の楽しさを感じ、好奇心を育み、新たな活動の場となる空間を整備します。

まず大人のディスカバリールームです。これは多様な実物資料にふれ、観察や調査ができる大人の興味や探求心に応えるコレクションルームです。一角では、博物館関係者の調査研究活動も見学でき、交流もできる空間を設け、一般利用者から高度利用者まで、

だれもが立ち寄りやすい、開放的なスペースとしたいと考えています。

また、情報通信技術を活用した環境学習の整備や情報発信を行います。

体験型交流空間としては、昔の道具の使用体験や参加者と対話し、交流できるサイエンスカフェなどを整備します。

23ページの屋外交流空間としましては、琵琶湖との一体感が体感できるヨシ帯、琵琶湖へとつながるトレイルの整備や、周辺の自然環境を利用した里山、農村の暮らし体験ができる空間の整備を行います。

レストラン等のアミューズメント機能は、博物館の魅力と価値を高め、新たな来館者層を掘り起こすためにも重要であると考えています。地元食材や独自の調理法など、話題性が高い魅力的なレストラン、琵琶湖を眺望できるカフェテリアやオリジナルグッズを販売するショップなど、アミューズメント機能の向上を目指したいと考えております。

24ページの交流機能の強化では、だれにとっても居心地がよく、開かれた交流活動の推進により、多様な人びととのつながりを広げていくことを目指します。

交流基盤の強化として、ユニバーサルデザイン化、情報発信力を強化し、新しい博物館の交流のあり方を提示していくため、さまざまな主体とネットワークを構築し、博物館がハブとなり、新たな博物館活動を展開します。

学校との連携では、学生たちの自主的な問題発見と学びを支援し、博物館と学校をつなぐ人材を育成し、博物館の高度利用を促進します。

また、はしかけ、フィールドレポーター等の制度の充実を図り、新たな協力者制度も検討いたします。

国際協力機能としては、国際湖沼環境委員会との連携を強化し、アジアの湖沼研究の窓口を目指すとともに、海外の博物館との連携を強化して、展示の国際化などを推進します。

それでは、25ページをお願いします。

利用者の視点に立った施設整備・運営の確保です。琵琶湖博物館の県外での認知度が低いという現状でございます。情報をよりわかりやすく、より多くの人々に発信することが重要と考えております。これまでの研究成果や交流活動の成果をもとに独自のコンテンツを制作し、情報発信を進めます。また、多様な人が訪れる施設として、ユニバーサルデザインの一層の推進を図ります。施設の省エネや耐震化と安全で効率的な施設整

備、休憩スペースやトイレ整備と、基本的なサービス向上に向けた整備も行います。さらに、企業や大学等と連携して、お互いに有益となるパートナーシップの構築、外部資金の導入にも努めていきたいと考えております。

26ページに、琵琶湖博物館のツリー図を用いて、リニューアルで目指す琵琶湖博物館の姿を描いております。琵琶湖博物館を一本の樹木に例えまして、調査や収集活動によりすい上げられた養分が、研究を通じて展示や交流活動や出版活動などで発信され、その果実を人々が享受し、その種が広がり新芽が芽生えて、それがやがて琵琶湖淀川水域まで広がり、そして琵琶湖博物館を取り巻く森が誕生していく。こうしたイメージ図でございます。

リニューアルを通じて、26ページの下にありますように、過去から学び、現在を見直し、未来を新たな視点で考える。そして、地域の問題を自分のこととして理解し、琵琶湖の大切さに気づき、誇りに思う人々が増加することを期待しております。また、博物館利用が促進し、新たな交流が生まれ、暮らしの中に博物館が定着すること、そして関西の命の水を預かる滋賀県・琵琶湖からの発信力が強化し、内外からの認知度が向上することを目指します。

以上でございます。

○市川会長：ありがとうございました。

大体時間どおり進んでおりますので、ここで10分間休憩をとり、休憩後に、今の議題について議論を進めていきたいと思っております。

25分から始めます。

〔午後 3時08分 休憩〕



〔午後 3時20分 再開〕

○市川会長：皆さんおそろいですので、始めたいと思っております。

先ほどの新琵琶湖博物館創造の説明について、ご質問、ご意見ございますでしょうか。

○廣畑委員：今、新琵琶湖博物館創造（リニューアル）を最初から最後まで説明をしていただきまして、調査結果から課題の整理をずっとされていて、その中で、今後どうしていいかというのがよくわかるんですね。すごくきれいにまとめられているなというふうに思うんです。

ただ、ここに書いていること、本当にこの第一期から第三期にかけてやっていくという中でも、ありとあらゆる方面に対して、こうやります、ああやりますというのがずっと書いてあるんですけど、まずそれぞれの内容で集客層、態度をはっきりさせていくということを、もっと明確にしていく必要があるんじゃないかなというふうに感じました。

今、お伺いしたプランでいくと何となく総花的な、それぞれのポイントだとか、それぞれのエリアに対してこうあります、こうありますよと。でも、そこには集客層のターゲットが多少見え隠れしているんですけども、来るお客さん全てにうけるような内容でつくっていきますみたいなのがベースで感じ取れるんですけど、こんな数字が続いたりしていくと総花的で、逆に、せっかくやったことが魅力につながっていかないみたいな、そういうことになってしまう危険性があるんじゃないかなと。

例えば、アミューズメントなんかのところだと、もっとよくしていきましょうという文章としても出ていたと思うんですけども、もっと明確に何かターゲットを決めて、こういう方向性に変えますみたいなものを打ち出していく必要があるんじゃないかなと。ここですと琵琶湖のすぐ横にあるわけですし、どのような形で改装されるかというのはまだわかりませんが、絵ガラス張りで琵琶湖側にレストランみたいなものを持っていくということであれば、夜の琵琶湖博物館とセットでデートスポットとして最高のものをつくるか、もっと明確なものをつくっていくようなコンセプトをしっかりと入れ込んでいくようなものに仕上げていくほうが、より魅力的なものになっていくんじゃないか。これとこれとか、場所、場所によって展開をする。

ここでどうのこうの、しようということじゃないんですが、具体的な実施計画に移っていくのに、そういうようなものを明確に出していくほうがいいんじゃないかと感じましたので、意見といえはおこがましいですけども、私の感想にかえさせていただきたいと思います。

○市川会長：ちょっと教えていただきたいんですけど、インターネットのアンケートの方法としては、どういうふうにされたんでしょうか。

○事務局（藤村課長）：これは現在、ビジョンの作成をお願いしております会社を通じて、インターネット調査の登録をいただいているものがありまして、今回の調査の性格等を踏まえて、その中から適切なサンプルを拾って調査させていただいております。

そういうインターネット調査の会社みたいなのがあって、そこに一般の人が登録をし

ている、そういうシステムがあるんです。それを利用して調査をさせていただいたという
うことでございます。

○市川会長：そうすると、サンプルというのは、例えばNHKでやっている世論調査みた
いに、誰かとわからないというんじゃないで、決められた中からサンプルを選んでいる
わけですね。

○事務局（藤村課長）：そうですね。年齢層とか、そうしたものを一定考慮し、サンプル
を選んでいると思います。

○市川会長：いやいや、初めから博物館にある程度興味ある人だけを選んだわけじゃ
ないですね。

○事務局（藤村課長）：そういうやり方はできないことになっておりますので、男女別、
そして年齢、居住地、そうした点しかわかりませんので、調査としてはそういったとこ
ろまで踏み込んで選んでいるわけではありません。

○市川会長：ありがとうございました。

ほか、何か。はい、どうぞ。

○菊池委員：すみません。今、廣畑委員がおっしゃったことと重なるんですけども、お
話を伺っていて、大人にも企業にも子どもにも、県外の方にも県内の方にも満足度が高
いというのは、現実的に実現できるのかどうかというところが非常に大きな課題がある
と思っています。

むしろ、その博物館として何に力を入れて、何を伝えていきたいのかというところが
あって、それを伝えるためにどういう手段をとるべきかというふうに考えたほうが、恐
らく博物館としての魅力というものを、皆さん自身があらわしてくれる大きな軸がで
ていくのではないかなというふうに感じました。

何でもかんでも、こういう意見があるから応えていこうという形ではなくて、皆さん
自身の意思も踏まえて、この部分は特に力を入れたいとか、あるいは皆さんの満足度
が高いところを、むしろ、もっと生かしていこうという、もう少し戦略的な個性の部分
も含めて、琵琶湖博物館らしさというものを考えながら、実現できる方法を考えていか
れたらいいのかなというふうに私も感じました。一つの意見として申し上げておきます。

○市川会長：ちょっと私から。

ターゲットですが、来たことがない人に来ていただくというのは当然大事なこと

が、一番効果が高いのは、年1回しか来なかった人に、2回来てもらう。年2回来ていた人に、3回きてもらう。多分、これが一番手っ取り早く来館者数を増やす方法だと思います。

そのためには、どうしたらいいのか。家族連れが多いということですが、日本中で多くの人たちが、家族連れらしく遊べる場所を探しているわけです。遊園地へ行ったらお金がかかるが、水族館や博物館だったら、遊園地ほどお金はかからない。そういう来館者が多いのだということは、当然つかんでおこなきゃいけません。

あと、年2回来ている人に3回来てもらうには、それなりの楽しいところにしていかなきゃいけない。昔からの博物館のイメージで、博物館は骸骨がいるところみたいに思っている方がいまだにいらっしゃいます。そういう人たちに、そうじゃなくて、「博物館で、すごく楽しいところだよ」というのを、どうやって広めていくか。1回来た人に、「うわあ、楽しかったな。また来よう」と、どうやったら思わせるか。多分、そこが一番大切なところじゃないかと思います。

今の子どもたち、体験が少ない、少ないとよく言われます。小学校でも、体験が一番重要だと言われている中で、博物館で何を体験させられるのかというところですね。私は、子どもが小さいときに化石掘りに連れていったり、魚釣りに連れていったりしましたが、今の子どもたちは、なかなかそういう体験がない。化石掘りに連れていくのは重労働です。でも、子どもが喜ぶから3回も4回も連れていきましたが、そういう体験を博物館でもできないことはない。そういう体験の部屋というのが固定的なものではなく、次回はまた違うことが体験できるというような展示があれば、年2回しか来なかった人も3回、4回来るようになるはずですよ。そういうものをどうやってつくっていくかというところが、多分これから一番大事じゃないかなという気がします。

前田さん、どうぞ。すみませんでした。

○前田委員：今、話題になっている「主眼を置く」というところに、私も賛成です。といいますのは、私は頻繁に博物館に来ていますので、皆さんの働いていらっしゃる姿を見ることが多いです。そうすると、物すごく忙しい。お話をするにも、今はだめというオーラが出ているほどお忙しいんです。それを考えますと、何かに主眼を置いて、今年がこれが大事、ここをターゲットにしようとして明確にして、それを実現するのが必要かと思っています。

ビジョン案に関して私が一番気になったのは、24ページ(3)に「利用者参加制度に、はしかけやフィールドレポーターのさらなる充実を図る。これ以外に、博物館と多様に関わり、個人の能力を発揮する新たな協力者制度の仕組みをつくる。」とある点です。この具体案が見えてこないんですけれども、どういうものを考えていらっしゃるのか、お尋ねします。

○事務局(藤村課長)：これにつきましては、例えば琵琶湖博物館友の会のような、広く博物館に関わってサポートをしていただける、そうした新たな制度を想定しております。ただ、これにつきましては現在検討をしておりますので、具体的にこういったものということはお示しのできる段階ではありませんが、友の会的なものを想定しております。

○前田委員：こちらの博物館の目玉といえるかどうかわかりませんが、博物館と利用者の交流活動としての位置づけから、「ボランティア」という語を使わない交流支援が、一つの大きな売りになっております。これまでも「友の会」をつくる案があったと聞きますが、友の会ともボランティアとも言わずに、「はしかけ」「フィールドレポーター」という新しい言葉を使って、新しい活動を創造していこうということできたと思うんです。おそらくアンケートをとられて必要性を感じられて新たにつくられるのだらうと思いますが、ボランティア(奉仕)性が強くなるということでしょうか。

○事務局(藤村課長)：はしかけ・フィールドレポーター制度は、全国に先駆けてつくったこれまでにない制度でございますが、今後は博物館に対する関わり方の多様性ということを考えていく必要があるかなと考えております。

そうした中で、1つ出てきたものが新たな協力者制度で、友の会というようなものですが、これは純粋なボランティアということになるかどうかというのは、今の段階では具体的に検討ができていないということですが、関わり方の多様性というものを模索していきたいなというように思っております。

○前田委員：わかりました。私も注目して見させていただきます。

○市川会長：ほか、何かございますか。

じゃ、どうぞ。

○伴委員：今ご説明の中で、現状分析と今後のプランとの間にちょっと乖離が見られるなと思ったことがございますので、お聞きしたいんです。

リニューアルを考えるのは、一つには来館数が激減しているところがあるんで

すよね。その減少したと考える原因が、何だというふうに考えておられるのかということをお聞きしたいのが1つです。

それから、アンケートをして、博物館を利用しなかった理由というのが、遠いからとか時間がないからとか、その博物館の内容と関係ないものが60%を占めております。それに対して、興味を持たれる催し物がないというのは30%です。これは、博物館の内容を変えても60%は来ないということの意味していると思うんですけども、この辺に対する対策というのは全くお話がなかったんですけど、これはどういうふうにお考えになっているのか、お聞きしたいんです。

○事務局（藤村課長）：まず1点目の来館者の減少の理由でございますが、具体的にデータとしてお示しをいたしておりませんが、琵琶湖博物館が定期的に行っている来館者アンケートでも、展示が更新されていずに見飽きたというような、そうした意見もございますし、いわゆる近年の環境課題に対応していないという、そうした意見もございます。こうしたことが、来館が減少した理由ではないかなというふうに考えております。

それと、遠いから、時間がないからという調査結果でございますが、これはインターネットの非来館者の調査で出てきた結果でございます。したがって、博物館を利用していない人の8割が県外居住者であるということから、遠い、時間がない、そうした理由が挙がってきているのかなというふうに思いますが、興味を惹かれる催し物がないということは、逆に捉えますと、興味があれば少々遠くても、あるいは時間がなくても来ていただけるのではないかと、そういう逆の考え方もあると思っております。

今回は、リニューアルによって博物館の魅力を掲げ、それを情報発信していく。特にターゲットとしている大人の層、そして県外の非利用者に情報発信をしていくということで、何とか来館者増につなげていきたいなというように考えております。

○兼房副館長：入館者数についてちょっと補足させていただきますと、ちなみに23年度末で37万1,000人ございました。それを分析してみますと、個人で来ていただくのと、それから団体で来ていただくのと、大きく分かります。

とりわけ、10年前と比較して大幅に減少したところは、実は一般の団体の方です。団体といいましても、例えば小中学校の修学旅行もあるんですけども、一般の方は10年前と比べまして8万人の減で、75%までになっている。25%も下回ってしまっているというのが一番大きな減です。

一方、小中学生を見てみますと、23年度で10万人ぐらい来ています。例えば小中学校の個人を見てみますと、4万人ぐらいで10年間余り変わっていません。だから、その小中学生が個人として来るケースは、年度によって変わりはないという分析結果が出ています。そこへ幼児、つまり未就学者を入れますと、団体も個人も入れますと37万人のうち、16万人が幼小中学校生で占めています。

繰り返しますが、一番顕著に出ていますのは、一般の団体の方が減っている。これは、団体で一遍行ったからいいわということもあるでしょうし、景気の動向もあるでしょうし、県外からお越しいただけるのも少ない、こういった状況だと考えております。

○伴委員：そうすると、一番減っているところに対する対策は、とりあえずは考えないという方針ですね。

○兼房副館長：ビジョンの中では、考えていくということです。

○伴委員：考えていくんですか。それでも、ここに織り込まれていませんでしたね。

○事務局（藤村課長）：先ほど2つのコンセプトとして、1つは、大人も日常的に楽しめる、活用できる博物館ということを目指しておりまして、その1つの具体的な取り組みといたしまして、22ページの交流空間の再構築で、大人のディスカバリールームの新設ということでレファレンス機能を強化して、大人が楽しめるような空間の新設を考えております。そうしたことで、大人をターゲットとして取り組んでいこうというのが、このビジョンに織り込まれている一つの考え方でございます。

○市川会長：どうぞ。

○橋詰委員：大人のディスカバリールームに来られる方というのは、私の想像ですけれども、子どものころから博物館に親しんでおられる方が多いのではないのでしょうか。そして今また、自分のお子さんを連れてみえる方が多いのではないかと思うのです。そうすると、対象がかぶってしまって「すそ野が広がっている」とは考えにくいです。また、例えば私は大阪から滋賀県にお嫁に来まして、「半分新住民、半分旧住民」という感じで、「ちょっと、旧住民に入れてもらえるのかなあ」という微妙な立場です。その私から地元のおじいちゃん、おばあちゃんの話聞いてみると、「1回は老人会で行ったよ。でも、もう十分。どんなところか分かったしね。」というような返事でした。私は、リピーターの方の利用も大切だとは思いますが、それ以上に「一人でも多くの滋賀県に住んでいる方」に来館してほしいと願っています。そのために、たった

1 回きり来館された年配の方々が再び来ていただくのには「どうしたらいいのか」ということを考えました。私は、県内の「元里山」をフィールドにした博物館に、自然観察指導員として働いています。そこで、里山だったフィールドを「いかに管理すべきか」ということを考えながら仕事をしています。地べた(土地)を持っておられて、里山の自然に直に関わっておられる年配の方々の苦労や工夫に触れる中で、いろいろなヒントをもらい、仕事に活かしてきました。その方々が、自分の土地(里山)を真面目に管理し続けられてきた結果、「ササユリ」が保全され、生物が多様な環境を残すことができた事実こそを大切に考え、参考にすべきだと思うのです。

私の父や母に「この事実」を話すと非常に興味を示していました。このように、生活に根差した取り組みは、地元(滋賀県)の年配の方々にも、興味をもってもらえるのではないかと思います。そこで、私は、この博物館が中心になり、そういった滋賀県の各地の取り組みを繋げ、発信する役割を担ってもらえたらと願っています。

もう一つお願いしたいのですけれど、県立大との連携と書いてあったのですが、滋賀大学はありませんでした。私は、仕事の中で、団体の受け入れをしていますが、たった1回の打ち合わせで、フィールドと博物館の展示を見学するというプログラムを一緒に作ります。学校の先生方は、とても忙しくしておられて、たった1回の下見だけでは不十分だと思いながら、それ以上のことはできずに当日を迎えています。そこで、滋賀大学の学生のように、学校の教員を目指す方々に、この博物館を利用してもらって、「この博物館では何ができるのか?できないのか?」ということ、大学生のちょっと余裕がある時に学んでもらって、実際に教師になった時に現場で活かしてもらいたいと考えています。充実した博物館の利用ができることで、将来、もしかしたら高校生や大学生になっても、個人的にこの博物館を利用する方々が増えるのではないかと思います。ぜひ、「学校の先生の卵」といわれる大学生の方々に研究や調査というかわりではなく、利用者としての経験を積んでもらえるように連携を取るべきだと思います。

○市川会長：どうぞ。

○小田委員：事前に資料を草稿の段階でいただいて読ませていただきましたけども、気持ちがわくわくするようなプランで非常に楽しいなと思いました。ただ、さっき廣畑さんもおっしゃったように、本当に全部できるのだろうかというのが正直な気持ちです。

私は大津生まれなので、打出浜の琵琶湖文化館から数えると50年近くのつき合いに

なりますけども、私の同僚に琵琶湖博物館で夜にイベントをやるんだよという話をしても、みんな知らない。

特に大阪あたりになると、琵琶湖博物館そのものを知らない。やっぱり知名度としては低いなというのが現実だと思います。

一方、滋賀県の観光パンフレットを見ていると、琵琶湖博物館は下のほうにちょっと名前が出てくるくらいで、余り大きく載ってないなという印象を受けるんですね。もちろんその努力はされていると思うんですけども、観光資源として生かせるものが琵琶湖博物館にあるんじゃないかなと思います。例えば地方へ行くとホテルのロビーにのぼりが出ていて、ホテルから送迎バスが出ていたりするんですが、草津のイオンモールにもそういうのがあってもいいと思うんです。

それから、淀川水系というのは、この博物館の一つのキーワードだと思います。ちょうど資料の最後に樹木の絵がありましたけども、琵琶湖という一つの幹の中に上流の根から水が吸い上がってきて、それが下流の葉っぱの葉脈に広がってゆくイメージが描かれているように、淀川水系に関わっている人たちにもっとこの博物館に関心を持ってほしいなと私は思います。

例えば、淀川水系の環境保全に関わっているたくさんのボランティアグループと連携がとれないかなと思います。この博物館には、はしかけとか、いろんな活動をしていく場はあると思うんですけども、そういうことだけに限定しないで、外部のグループの方が来て、ここで何かできるような場があればいいなと思います。

また、さっきおっしゃっていた大人のディスカバリールームですが、私も家の居間でカエルの解剖なんかできませんし、切り開いた虫こぶからダニがいっぱい出てきたりして、困るんですけども、そういったことのできる実験室があったらうれしいなと思います。インターネットカフェに行く感覚で1時間1,000円でも、2,000円でも有料で設備が使い、学芸員の方がサポートしてくださるのだったら、お金を出してでも利用したいと考えます。

それから、現物の展示に関して、確かに一遍見たら、もういいやという声があるんですが、いろんな展示テーマに沿った小さな展示物が常に並べ替えられたらおもしろいと思うんです。地方へ行って、小さい郷土資料館を覗く趣味があるんですけども、古い農機具が雑然と並んでいるだけのあまり興味を惹かないところであっても、そういうとこ

ろには名物館長さんがおられて、非常に話がおもしろいので、聞いているとなかなか帰れなくなってしまうんです。

昔、ここの博物館にも展示を説明してくださる方がたくさんいらっしゃったと思うんですが、今はそういう方はあまりいらっしゃらないのか、見て廻るだけというふうになってしまっているように思います。もちろん経費の問題とか、いろいろあると思うんですけども、私は人が説明する仕組みというのは必要だと思っています。最近、はやりのW i - F i でもって、ゲーム機やスマートホンで解説を聞かせるという方法もあるんですけども、やっぱり人と会話をして、その展示物について話をしていくというストーリー性が要るなと思うんです。

それから、今回のプランの中でおもしろいなと思ったのは、空間的、時間的な横の流れだけじゃなしに、垂直的なおもしろい企画をしようとしているように感じるんです。人の興味というのは、ここに来られる方が「100人いれば、100人ともに興味を持っておられることは違うと思います。それは一つの入口であって、そこから展示物を観ていく中で、いろんなところに興味が飛んでいく。例えば水槽の魚を見ていると、別の展示でみた琵琶湖の歴史がリンクしてくる、そこに新しい発見が忽然と生まれてきて、そういう知識のクロスオーバーがすごくおもしろいなと思います。

フロアの上下で異なるテーマや展示物が有機的につながって新しい発見ができる、そんな人の動きができたらいいなというふうに思うところです。非常にテーマがたくさんあって難しいと思うんですけど、ぜひ実現していただきたいなと思います。

○市川会長：ありがとうございました。

ほか、何かございますか。

どうぞ。

○松江委員：幾つかは皆さんとお話が重複しますので、私なりに3点ほど話しておきたいと思います。

先ほど副館長のほうからも、一般の団体のお客さんが減ってきているというお話です。例えば、その一般団体のお客さんを増やすために、さきのアクセスの問題で、ほとんどが車に乗ってくる。団体になると、当然バスという手段になろうかと思っています。いわゆるバスツアーのようなもので、県内の観光に来られた方を必ずここを訪れていただけるような仕掛けというのが一つ要るんじゃないか。そのためには、旅行代理店、エージェ

ント向けの琵琶湖博物館なりの商品といたしまししょうか、そういうエージェント向けの商品の一つを開発して、旅行代理店に対するアプローチもこの中でやってもらったらどうかというふうに思います。多分、この提案の中にそれがなかったかなと思いますので、一つの発想の視点としては、旅行代理店、エージェント向けの商品開発による団体バス客の獲得ということは一つあったかだと思います。

あと、22、23ページにありますように、交流空間の再構築の中で、4番目の屋外交流空間のところが非常に大事だと思いますし、長いリニューアル計画の中で、できるだけ早く着手していただきたいなと思うところです。

琵琶湖というイメージからいうと、やはり水というのはどうしても切り離せませんので、その水辺の空間というのが絶対必要かだと思います。琵琶湖博物館に来て、水にさわらなかったということがないようにして、必ず琵琶湖の水そのものに触れることが体験できる。特に夏場なんかは子どもさんとか家族連れが来られて、琵琶湖の水にさわったり、琵琶湖の中に足をつけたり、入ったよということが体験できるという、水と触れ合う、琵琶湖と触れ合う空間が現実的にしっかりと欲しいなと。その中に動物がいたり、あるいはヨシとか植物があつたりという体験が、この中でできるという空間が早急に欲しいなという気がします。

あと、5番のレストラン等アミューズメントに関連することでしょうけれども、ここでの地産地消なんかを生かして食の文化の部分をもう少ししっかりと打ち出してほしい。やっぱり滋賀県の食文化というのは、琵琶湖の恵みなしでは語れないというふうに思いますし、例えば近江牛にしても近江米にしても、近江のお茶、それから湖魚、これは県のブランド推進課のほうで、4つのブランドで非常に強力に進められております。「明日の京都」で、この4つのブランドの発表会が、京都向けに行われます。100人以上の方が、あすその発表会と試食会に参加されると聞いております。私も行くんですけども、そういう県が押し出しているブランド、食のブランドみたいなものもこの琵琶湖博物館の中で体験できる、味わえるといったものがアミューズメントの部分で非常に大きな誘因になってくるんじゃないかというふうに思いますので、その部分に力を入れて、博物館だけじゃなくて、県のそういうブランドの部分でやるとか、農水関係でやるとか、そういうところと連携しながら、何か打ち出せないかなというのも一つお願いしたいなと思います。以上です。

○市川会長：どうぞ。

○北島委員：最近は理科離れという話がよく出ていて、昨日、ある人としゃべっていると、教員自身が結構深刻なところがあるんですけども、その中でいろいろ支援いただいていることにすごく感謝しています。

滋賀県に小学校が231ありますが、その中で校内研究のテーマで理科をやっているのが2校ぐらいしかないということで、ほとんどが国語科や算数科、総合的な学習になっているのが現状ですし、なかなか理科・理数関係は力を入れていかないとあかんなどいうことを私自身は思っています。

その中で、連携ということと周知のことで、2点だけしゃべらしていただこうかなと思います。先ほど滋賀大教育学部との連携とおっしゃっていましたが、昨日、立命館大学からパンフレットが来て、インターンシップの話なんですけども、小中の教員を目指している学生が多いということで、そこで研修の場というところを求めていらっしゃる場所があるので、そういうところも多分されているのかもわかりませんが、草津にもありますので、立命館大学との連携ということも必要かなということをおもっています。

また、淀川水系の話が出ましたけども、滋賀県の環境学習船のフローティングスクールが淀川水系、大阪とか京都とかの子どもたちを乗せるという航海があります。その中の航路の一つに、学習の場として琵琶湖博物館も見てもらおうと、他府県の子どもたちが一遍来たら、家の人も連れてこようかという話になるのかなということをおもっていました。また、2月2日に、「こども環境会議」というのがあったんですけど、そこで配られていたチラシでは、「クイズで知るびわ湖」というのが、ここであるんですかね。そういうところでもすごくタイアップされているなと思ったので、いろんなところとの連携というのが必要かなということをおもいました。

また、周知について言うと、ここの烏丸半島を会場にしたいろんなイベントがたくさんあって、例えば9月にはイナズマロックがあり、またレークサイドマラソンというのは県外から結構たくさん来られるし、規模としてすごいので、そういうところで打ち出しがあるといいかなということをおもっていました。また、学校のほうへの切り口というところでもう少し掘り起こしていくと、廣畑委員がされているところでは、学校向けに何年生はこういうことができますよというような具体的なパンフをつくって配ってくだ

さっています。先ほどおっしゃってくださったように学校はすごく忙しいので、具体的に、こういう学習ができるのかというのをもらえると、さっと入っていけるなと思います。そういうところで、また支援していただけるとありがたいなと思っています。以上です。

○市川会長：はい、ありがとうございました。

○津屋委員：最初に会長がおっしゃったことにすごく共感しますし、先ほど松江委員がおっしゃった食文化のところもすごく共感します。私は仕事柄、子どものそういう体験プログラムの現場にいて、いろんな企画に関わっています。最近は福島のほうも頻繁に行って、被災地の教育委員会の教育長さんとお話する中で、食のところが部分的に教育的に大事なところになります。

私も、子どもがおりまして保護者をしているんですけど、イベントに参加する保護者の層が親子三代なんです。私なんか、おばあちゃんぐらいの世代になっているかもしれないんですけども、若い親子というよりは親子三代が一つになって、一大家族というのは非常に人数が多くて、一緒に楽しんで、一緒に遊べるというのは、今の若いおばあちゃん、おじいちゃんのように思って、私たちのころは、お父さん、お母さんは、なかなかそういうところにはついてきてくれなかったんです。

今は、親子三代というのが実はすごく重要なターゲットですけど、インターネットですけど。もちろん今あるものの新博物館構想ではありますが、親子三代というところを大事にしたプログラムというのはすごく大事だし、集客が一番高いところではないかなと思います。

会長がおっしゃったように、次にどんな体験ができるだろうとわくわくさせながら、博物館だからこそ展示ができる。お家ではなかなかできないことって、いっぱい引き出しがあると思うんですけど、私も前のときも使わせていただいているんですけど、そういう体験プログラムの熟成度が、どうしても皆さんお忙しいから、なかなか厳しいという現状も実際聞かせてもらっているんですけど、このリニューアル構想は最終34年という、10年後になる。あと10年後というと、今いるおばあちゃん世代から昔の生活や暮らし、また食の話がもう聞けなくなってしまう、語り部がいなくなってしまう。

だから、昔と今も体験するという気はあったんですけど、それを実体験としてつなぐ。願わくば、来館している方がギャラリートークできる。それが昔と今をつなぐコンセプト

トかなと思うんです。伝統野菜、昔野菜のことや、地産地消のことや、とことんそこにこだわったレストランであり、そういう体験なり、本当にやりたいと思うような中身になると思います。

今、幼稚園では、おみそ汁を飲んだことがない子どもがいるんですよ。園長先生が泣いていました。この茶色のものは何というお子さんもいる。決して悪気はなく、作り方がわからなかったり、お野菜の本当の味がわからなかったり、そんなことまで博物館がするのとおっしゃるかもしれないけど、琵琶湖博物館の中には生活文化の発信という貴重な部分を、ぜひ家庭教育のほうにベクトルを向けていただいて、親子三代が集える、楽しめる、学べる、感じられる、そういうところをこのリニューアルの中にも特出ししてほしいなと、この親心をぜひまた出してほしいなと思って、きょうもしつこく言わせていただいています。

○市川会長：40年近く前ですけどサンフランシスコに行ったときに、エクスプロラトリウムという施設がありまして、体育館みたいな広いところにいろんな人たちがいてブースをつくっていました。いろんな実験器具を持ってきて、『サイエンスの屋台』という感じでブースを作っていました。それぞれのブースにたくさんの大人が集まって楽しんでいました。今でもあるかどうかわかりませんが、非常に人気があって楽しかったです。物理や化学の実験だけでなく、生物の実験も結構ありました。それと同じものはつくれないでしょうけれど、似たようなことはできると思います。今おっしゃったような食の部分もあってもいいと思います。例えば、講師を及びして、みんなで鮎寿司の漬け込みをしましょうのようなイベントを次々やっていくというのは、大人のディスカバーリーとして結構おもしろいんじゃないかという気がします。

遠くて、時間がないと言いますが、ディズニーランドはお金をかけて、一泊で行きますよね。だから、アミューズメント性を高めればお客さんはたくさんやってきます。博物館を含めて観覧施設の展示は、お客様のニーズと、何を見せたいかという施設側の意向の2つの方向からの引っ張り合いで決まるわけですが、できれば余りニーズに引っ張られてほしくない。私たちはこれを見せたいんだというところを、もっとドーンと押し出してもいいんじゃないかという気がします。

私も今の水族館をリニューアルするときに、「僕の前に道はない。僕の後に道ができる」でいいんじゃないかという感じで作りましたが、それくらい自信を持って、自分た

ちはこれを見せたいんだという、そういう気概のあるものをつくってほしいです。ただし、ひとりよがりになるとお客さんが来ませんから、そこでいかに楽しいものをつくっていくかということが、やっぱり一番大事でないかなと思います。

はい、どうぞ。

○菊池委員：実は、きょう午前中に別件で博物館にうちあわせに来ていまして、4年ぶりぐらいに展示を拝見させていただいたんですが、C展示室の古いお家の展示があります。例えばそこに地元のおばあちゃんがいる、子どもと遊んでくれば、子どもを見てもらっている間にお母さんがゆっくり博物館を回れる。

あと、きょう衝撃的だったのが、新展示室の岩のところにカワニナがついていて、案内している人に、「これ何だと思いませんか」と言われたんです。で、「チクブカワニナといって、竹生島にしかない貝殻をつけているんです」という話があって。そういうのは、普通に見ている人は絶対目にしないんだけど、イースターエッグのように、見つけるのがすごく楽しかったんですね。「あっ、こんなところにおる」というのが。

なので、展示更新ももちろん大事ですけど、当たり前に通っているけど、目に入っていないものを、例えば1カ月おきにちょっとずつでも、ポップみたいな形で博物館の学芸員の方に書いてもらう。それだけでも、恐らく毎月違う博物館に来ているような気持ちになると思います。こういう博物館だったらパスポートを買ってきたいなというような、そういうリピーターを増やしていく仕組みというのは、必ずしも大きな展示更新あるいはリニューアルということをしなくても、幾らでも仕掛けていけるものじゃないのかなというふうに思います。やっぱり会長がおっしゃったように、何を見せたいんだ、何を知ってほしいんだ、というところを、人材を生かして見せ方を工夫していくというところもセットでしていただけたらなというふうに思いました。

あと、私も小さい子どもがいるんですけど、遠くに行きたくないと思うのは、時間をかけている割に長居できないというのが原因の一つです。食事がもう少し魅力的だと、午前中から来て、おいしいものを食べて、もっとリラックスして疲れを取ったら、また違う展示室も観る、ということが出来るんですけど、正直、今の琵琶湖博物館は長居するのはしんどい。家族連れも長居ができる、パスポートを買いたくなる、というところは、少し意識して考えていただけたらなというふうに思います。

○市川会長：ありがとうございました。

ほか、もう少し時間がありますが、はい、どうぞ。

○山本委員：リニューアルに向けた考え方の中で、ユニバーサルデザインを一層推進するという部分があるんですけども、今まで駐車場の関係とか導線の関係とか、いろいろ言わせてもらいましたが、ここで利用者に関してのユニバーサルデザインというのは、書かれたり、考えられていたりされていると思うんです。

質問というか、中には、今は学生さんであっても学芸員になって、障がいを持っていても、ここで働きたいというようなことが出てくる可能性もあります。そういうふうな方にとって、この施設で働けるようなリニューアルを考えておられるのかというのを、ちょっと書いていなかった部分で聞きたいなと思ひまして、質問させていただきます。

○事務局（藤村課長）：ユニバーサルデザイン化の考え方の中には、外部からお見えになっているお客様だけではなく、誰にとっても使いやすい施設ということは念頭に置いております。ただ、具体的に、そうした障がいを持つ方も学芸員としてというような前提では、ちょっと表記をするということまでに至っていない状況でございます。

○山本委員：それなら、それを踏まえてお願いしたいんですけども、ユニバーサルデザインの物品を売るんじゃなくて、この施設では全てユニバーサルデザインであれば、たまたま職員さんとして来られた方が、そういう障がいを持っておられた方であっても、仕事をすることは可能であるというような考え方を持っていただければ、利用者だけでなく、この施設全部がユニバーサルデザインのところへ進めていくという形をお願いしたいなと思ひます。

○市川会長：そろそろ時間が過ぎるんですが、コンセプトに関する部分、それから研究に関する部分、水族展示に関する部分の話が全く出ていないんですが、このあと、それを話し合う場があるんですか。

○事務局（藤村課長）：ビジョンに関しましては、今回の協議会だけになります。来年以降、基本計画の策定を進めます。その中では、水族展示であったり、C展示であったり、より具体的にどうするかということを検討したいと思っておりますので、その機会にぜひご意見をいただきたいと思ひます。

○市川会長：はい、わかりました。

コンセプトに関する部分なんですが、湖国と人間というテーマの基本は水と人間だと思ひます。滋賀県だけじゃないでしょうが、昔は水やエネルギーを非常に上手に使って

暮らすという暮らし方があったわけですが、水道が敷かれてトイレが水洗になっていく中で、水は使い放題、エネルギーも使い放題になりました。大量生産、大量消費、大量廃棄ですね。そういう時代が30年ほどありました。そして今、また循環型の社会に戻さなきゃいけないと言われているんですが、じゃ、水の使い方はどうなったかというところ、多分30年なれ親しんできた方法で皆さんまだ使っている。エネルギーも同じように使っている。

それでは、これから水と人間の間をどうするのが、問題になってきます。現状の博物館の展示の中で、昔の生活を示した展示があるわけですが、あれが郷愁ではなくて、昔はこういう循環型の社会があったんだよということがきちんと伝わるようにしてほしいと思います。とにかく、水と人間の間を考えた直さなきゃいけない時代がもう始まっているわけで、そのところで博物館は何ができるか。やっぱりコンセプトに関する問題なんで、もうちょっと考えてもらったらいいのかなという気がします。

私、一人でしゃべってしまいましたが、この議題につきましては、このあたりにして構いませんか。

そしたら、時間もそろそろなくなってきましたので、これで終わりにしていいですか。

○兼房副館長：じゃ、先ほど各委員さんからお話しいただいた中で、弁解ではないんですけども、もう取り込んでいるところもたくさんございまして、後ろのほうから少し言わんかいと言われるとあきませんので、言うていきたいと思います。

小田先生のほうから、お客さんと対話をしながら、単に案内するだけではなくてということをおっしゃったと思いますが、現在、開館以来展示交流員の方が、赤いビニールの方ですけども、常時15名ぐらい張りついて、ごらんになっている方にできるだけお話しかけをし、説明とともに、いろんな情報交換をしているというのが今までやっております。これを、今回のリニューアルに向けて、そういったあり方についても一歩も二歩も進めればなという考えは持っております。

それと、バスツアー計画でございまして、実はこれもやりましたが、こちらのほうで計画をつくって、例えば湖西方面からはなかなかお越しただけていないということもありまして、一遍うちのほうでいろんなコースを設定してやってみようかということで、うちに来ていただくのに、バスでどれぐらいかかるのかと。だから、どれぐらいかかるという情報提供をできるようなチラシをつくってこないかということで、某業

者に言いましたが、やってやれないことはないんですけども、バスをチャーターするのになんぼというやり方になりますと、これは競争なんで、結局、そこに上げて成り立たないということで、いろいろとその知恵も貸していただいたんですけども、現実にはならなかったというようなこともあります。

あと、水辺の空間の使い方、食文化の部分等々につきましては、この基本計画の中で具体的に検討していける部分ということで、既に検討を始めております。

それから、大学生の受け入れにつきましては、博物館学ということであるんですけども、専攻を考えておられる方、教員になられる大学生の方を一定期間研修生として受け入れてやっております。毎年やっております。

それから、フローティングですけども、実は昨年からフローティングが、この帰帆島に寄航するのを撤退してしまいました。といいますのも、その帰帆島の岸壁に「うみのこ」をつけようと思いますと、帰帆島の維持管理上から経費を負担していただくという形になっています。これは博物館だけでなく、この帰帆島の構成メンバーになっています草津市さん、水公団あるいは私ども、こういったところで、この全体の管理を負担しながらやっているんですけども、そうしますと、あそこに接岸するのに経費、あるいはその修景保全に経費が要っているわけですし、それをご負担いただくという形になっていました。しかしながら、県の財政事情からすれば、教育委員会としてもなかなか維持できないという判断があったようでございまして、個々に接岸をすることはないということを昨年からやられていまして、残念ですけども、私もいろいろと働きかけはしましたけども、復活にはなっていないというような状況であります。

あと、地産地消の考え方ですけども、まさにそのレストランの中でそういったことを考えていこうということで、今もう始めております。「あさ、ひる、ばん 博物館を楽しもう！」ということで、3日間ほど、年1回イベントをやっているんですけども、24年度からは、農政水産部と連携いたしまして、いわゆる特産物をこの会場で食していただく等々の機会を持ちまして、次のヒントにならないかということで、今年度から少しやり始めましたところです。

こういったように、いろんな面で一応議論は始めてございますけれども、いずれにしても、具体的には基本計画の中でもう少し詰めていけるかなと思っています。

すみません。弁解ではないんですけども。

○市川会長：いいですか。

それでは、これもちまして、本日の議事を終了したいと思います。

長時間にわたり、貴重なご意見ありがとうございました。

事務局に進行をお返しいたします。

3 閉 会

○兼房副館長：長時間にわたりまして、ご審議いただきましてありがとうございます。

さきにも申し上げましたけれども、この3月末までに、新琵琶湖博物館創造のビジョン、基本構想の部分になりますけれども、今ご協議いただいたご意見等をもう一度検討させていただいて、これをこの2月議会において報告をさせていただいて、ビジョン策定になるということでございます。

来年度は、いよいよこのビジョンをもとに、基本計画から基本設計のほうに入れればなというふうに思っているんですけども、できるだけ上期にもう少し姿が見える形に進めていきたいと思っています。

つきましては、来年度の当協議会、多分8月か9月に第1回目ということで始めさせてもらうことになると思いますが、その場では、ご説明できる部分がたくさんあるものと思っております。

いずれにしましても、来年度上期が勝負ですので、皆様方には忌憚のない意見等いただければと思っております。

本日は、どうもお忙しいところありがとうございました。

[午後 4時26分 閉会]